
雪の涙

南国果実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の涙

【Nコード】

N80050

【作者名】

南国果実

【あらすじ】

五十嵐健人はそこらへんの高校に通う2年生。彼は、中学の頃に雪の女王と呼ばれていた少女、七海幸と毎日登校している。そんな彼に、ラブレターが届いて……………

(前書き)

作者初の短編投稿です。一応、見直しはしましたがけど誤字などがあれば指摘していただけると嬉しいです。

「ああゝ寒みい」

俺、五十嵐健人いがらし けんとはそこらの進学校に通う普通の高校2年生だ。

「煩い」

「おい、友達への思いやりとか無いのかよ」

「無い」

今は登校中。一緒にいるのは七海幸ななみ さち、同じ高校で唯一中学から一緒のヤツ。本当はもう1つ上の高校に行けたはずなのに行かなかった変人。言葉数が少なく無表情で冷めた目をしてるから、中学の時のアダ名は雪の女王。俺は毎日コイツと登校している。

「ブレザー貸してくれとは言わないけどさ、優しい言葉の1つ位かけてくれても良いんじゃないかねえの？」

「私にそれを期待するの？」

「……できねえよな」

「諦めなさい」

なぜ俺がこんな女王様と一緒に登校してるか教えよう。簡単だ、好きだから。

いや、言っとくけど俺は正常な人だよ。決して、冷たい目で睨ま

れてはあはあ言うような変態さんじゃない。ああ見えて面倒見が良くて優しい性格に惚れたんだよ。

「ほい、じゃあ」

「ええ、ちゃんと5分待ってから来てよ」

ここは学校から少し離れた場所。誤解を受けないために俺たちは、いつもここで別れて別々に学校に到着する。

俺としては軽く辛い。

「……どうしよう」

うん、ホントどうしよう。

俺が悩んでいるのはこの手紙のせいだ。今朝俺の机の中に入っていた。内容を要約すると『話があります。放課後屋上に来て下ださい』的な感じ。

ってか今時ラブレター出す人っているんだな……

俺は好きな女子以外から告られても付き合ったりする気はないので、まあそこまでなら悩むことはなかっただろう。でもさ、でもさ、差出人を見たらなんとまさかの学校1の美人さんなんだよ。確かに俺が好きなのは七海だけちょっと位心が揺れるのはしかたないよね。ね！

「何やってんだ五十嵐い？お前、絶対に先生の話聞いてないだ

ろ？」

「えっ……すいません」

そういえば授業中だ。完全に忘れてた。

授業中に決心をした俺は、とりあえず七海に相談することにした。女子と男子だが、アイツはかなり話かけやすい。

なぜかって？簡単。アイツ俺以外の友達いないから。それに俺は誰にでも優しい人的なキャラだし。

たまに「お前ってあんなヤツにでも無条件で優しいよな」とか言われると、ちょっと良心が痛む。だって下心MAXなんだもの！

「なあ、七海」

「何？」

「簡潔に言おう。ラブレターの返事に困ってる相談に乗ってくれ」

漫画ならブブッ！！って効果音が出そうな勢いで、七海が飲んでいた牛乳を吹いた。

あ、言い忘れてたけど今は給食の時間ね。

「誰から？」

「え……狩野山だけど」

「美人じゃない？」

「いや、そうなんだけど……実は俺さ、好きなヤツがいてな……でも狩野山は美人だし……ってことでお前に相談なんだ」

その好きなヤツはお前なんですけどね！

もちろんの事、そんなこと言えない俺は頑張って声や顔に出ないように必死でポーカークフェイスを保っています。

すると七海は、牛乳を拭いていたハンカチを俺に投げつけ、呟いた。

「（…勝手に……しなさいよ）」

「え？」

「勝手にしなさいよ!!」

机を叩きつけて立ち上がりながら七海は叫んだ。突然大きな声を出したせいでクラスの視線が集まっていることも気にせず、七海は教室を飛び出して行った。

「七海……?」

その後で、何人も俺に「どうした?」と尋ねてきたが、俺はただ「なんでもない」とだけ返していた。そして、七海は放課後になっても教室に帰って来なかった。

「五十嵐君、好きです！付き合ってください！」

俺は今、屋上にいる。用はもちろんあのラブレターの返事だ。狩野山は、もじもじしながらもまっすぐに俺の方を向いて、言ってくれた。だから、俺もすっかり返事をしたと思う。

「狩野山、俺は」

と、そこまで言いかけた時、唐突に出入り口の戸が開き…七海が……飛び出してきた。

「止めて」

「七海…さん……？」

「何で、お前が？」

七海は目尻に涙を溜め、普段なら考えられないような大声と言葉数の多さで叫んだ。

「イヤなのよ！！アンタから誰かのことを好きだって聞くのとか、ラブレター貰ったって聞くのとか！私以外の女子といるのとか！怖い！！アンタが私の傍からいなくなるのが！私と一緒にいてくれないのが！好きなのよ！！どうしようもない位アンタが好きな！！愛でも何でもないただのエゴだけど！私は……私は！ずっとアンタの傍にいたい！！」

「わっ、わたっ、私も好き！七海さんに負けないぐらい五十嵐君が好き！！」

俺は思わず言葉に詰まってしまった。でも、いわなくちゃいけない。2人ともちゃんと伝えてくれたんだから俺も、伝えないと。

「俺は、七海が好きだああああ!!!」

それを聞いて、狩野山は納得したように屋上から走っていった。後に残ったのは俺と、七海。

「本当よね、嘘じゃないわよね。狩野山さんを追い払うために適当なところ言ったんじゃないわよね。ちゃんと、本当に……………私のことが、好きなのよね?」

「ああ、俺は七海が、七海幸が好きだ」

「私、嫉妬深いよ?すぐやきもち焼くよ?アンタが私以外の女子といるのとか見たら拗ねるよ?それに大学にでも会社にでもにアンタついて行くわよ?」

「だから何だよ、俺はお前が大好きなんだよ。そんな事くらいで嫌いになるなんてムリだ」

言った途端、七海が嗚咽を鳴らして泣き始めた。

「何だよ…泣くなよ」

「煩い、嬉し涙よ」

その涙は俺が初めてみる、雪の女王の涙だった。

(後書き)

感想をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8005o/>

雪の涙

2010年11月9日03時26分発行